

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 相原まり子

博士課程学位請求論文：「中国語の直示移動動詞の研究—文法化した“来”、“去”の意味と統語的特徴—」

直示移動動詞は、通言語的にさまざまな機能語に文法化していることが知られており、中国語の直示移動動詞“来（来る）”“去（行く）”にも複数の方向への文法化が見られる。本論文は、動詞句の前に現れる文法化した“来”“去”を考察対象とし、(i) 意味と統語的特徴、(ii) 文法カテゴリー上の位置づけ、(iii) 文法化の経路、(iv) 他言語の直示移動動詞の文法化との共通点および相違点について論じたものである。

本論文は5章から構成されている。第1章では、研究の目的、考察対象、データ、論文の構成について述べた。第2章では、“那好，你先休息，我来做饭。（じゃいいよ、あなた先に休んで、私がお飯を作るから。）”のような、前に動作者名詞句（=NP_a）が現れる場合の文法化した“来”（=“来 f1”）を取り上げ、“来 f1”が「後ろの述語（VP）の表す行為が〔話者領域【場】〕において誰かが行う必要のある行為であることを前提とし、NP_aの指示対象が〔話者領域【場】〕に心理的に移動してその行為を実現させることを話し手またはそれに準じる人物が希求する」という意味を担うものであることを論証した。さらに、“来 f1”と一般的なモダリティ動詞、モダリティ副詞との共通点および相違点を明らかにし、“来 f1”が動詞から脱範疇化しつつあることを指摘し、加えて、共時的な考察を通して、物理的移動を表す“来”から“来 f1”への文法化の道筋を推定した。第3章では、“能否给我一段时间，让我去考虑。（私に少し時間をくれませんか、私に考えさせてください。）”のような、前にNP_aが現れる場合の文法化した“去”（=“去 f1”）を取り上げ、“去 f1”が「〔話者領域【場】〕内のNP_aが後ろのVPの表す行為を行うことを意図して〔他者領域【場】〕に心理的に移動し、その行為を実現する」という非現実事態を表すものであることを明らかにした。さらに、“去 f1”は、“来 f1”と異なり、後ろのVPを「誰かがやるべき行為」として表示しているわけではなく、話し手の希求を表す機能も持たないことを論証し、併せて、物理的移動を表す“去”から“去 f1”への文法化の道筋を推定し、最後に、“去 f1”と“来 f1”の非対称性を生み出した要因について論じた。

第4章では、“我按照这个理论来分析现代汉语的语序问题。（私はこの理論に従って現代中国語の語順の問題を分析する。）”“我们打算用这个办法去帮助他。（私たちはこの方法を用いて彼を助けるつもりだ。）”のような、動詞句や前置詞句などが前に現れる“来”“去”（=“来 f2”“去 f2”）を取り上げた。まず“来 f2”は「NP_aの指示対象が後ろのVPの表す行為を〔話者領域【場】〕で行うことを目的とし、前に現れる成分の表すやり方で実現する」という意味を表し、“去 f2”は「NP_aの指示対象が後ろのVPの表す行為を〔他者領域【場】〕で行うことを目的とし、前に現れる成分の表すやり方で実現する」という意味を表すことを示し

た。併せて、一部の先行研究が“来 f2”“去 f2”を後置詞と見なすことの妥当性を問い直し、[来 f2/去 f2+VP]が一つのかたまり（構成素）を成していることを示したうえで、“来 f2”“去 f2”が方向補語の“来”“去”を経由して文法化したものとする先行研究の推定を踏まえつつ、方向補語から“来 f2”“去 f2”への変化の道筋について新たな仮説を提示した。また、“来 f2”と“来 f1”、“去 f2”と去 f1”をそれぞれ比較し、共通点と相違点を指摘した。第5章では、通言語的視点から“来”“去”の文法化を考察し、他言語の直示移動動詞の文法化と複数の類似点、共通点があることを明らかにした。

以上、本論文の概要とその学術的価値を述べたが、本論文の大きな学術的貢献として以下のことも併せて指摘しておきたい。従来、“来 f1”と“去 f1”の違いについては、NPaの関与する場や方向の違いのみが指摘されてきたが、本論文によって“来 f1”と“去 f1”は意味的に非対称であり、統語的にも大きな違いが見られるという事実が明らかになった。また、本研究により、これまでほとんど論じられてこなかった“来 f1”“去 f1”と一般的なモダリティ表現との違いが明確になった。さらに、従来、“来 f2”と“去 f2”については、それぞれ“来 f1”および“去 f1”と区別せずに同一の説明が与えられることもあれば、全く異なる説明が与えられることもあったが、本論文の分析を通して、それぞれの共通点と相違点が浮き彫りとなった。これまでに文法化が報告されている諸言語との比較を行うことで、物理的移動を表す“来”から“来”f1への文法化には、「【行為遂行の必要性の認定】 + 【(NPaによる) 行為の実現への希求】」という二重の主観的態度の表明や主語の脱主題化など中国語特有の意味機能の獲得が伴うという新たな事実も明らかにされた。

さまざまな“来”の用法についての説明に部分的ではあるが統一性を欠くこと、また、文法化の経路の推定に歴史的な検証がなお課題として残ることなど、いくつかの改善点を残しはするものの、それらは、永らく懸案とされてきた、非述語動詞として用いられる場合の“来”と“去”の意味機能を、文法化の観点から説得力のある論拠を以って明らかにした本論文の学術的価値を損ねるものではない。したがって、本審査委員会は、本論文を博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。